

音声部分反訳書

2009年10月24日放送「報道特集NEXT」 特集より



キャスター（田丸美寿々）

「続いては、今日の特集なんですが、このところ、日本の科学者たちが次々にノーベル賞を受賞して日本の科学や研究が世界から高い評価を受けています。」

「こうした中、筑波大学が去年下したある処分に、世界の科学者たちの注目が集まっています。」

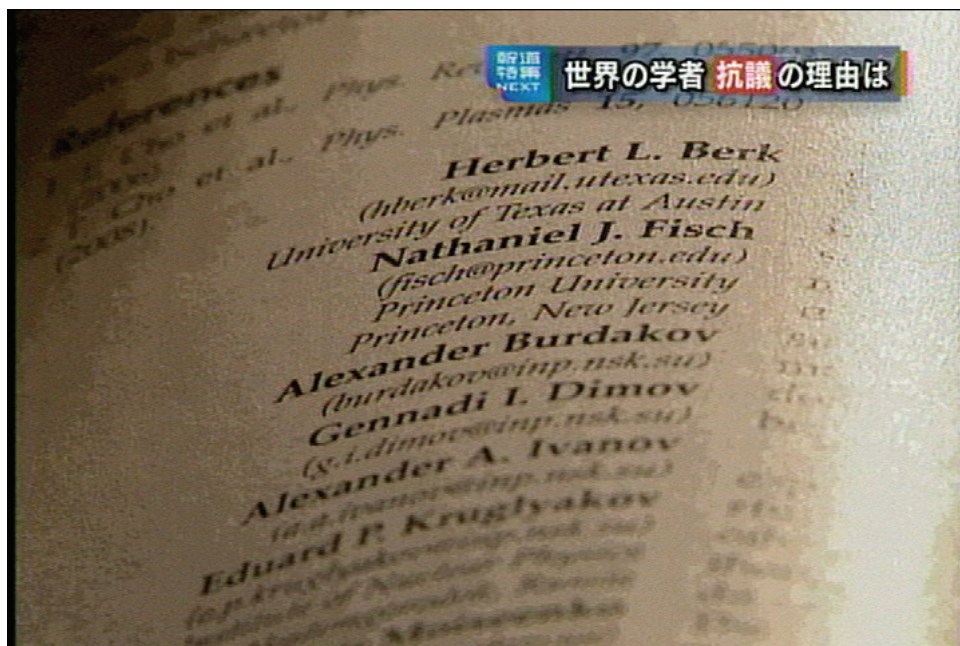
「1人の大学教授を懲戒解雇にしたというものなんですが、この処分の裏には一体、何があったのでしょうか。」

春の園遊会。

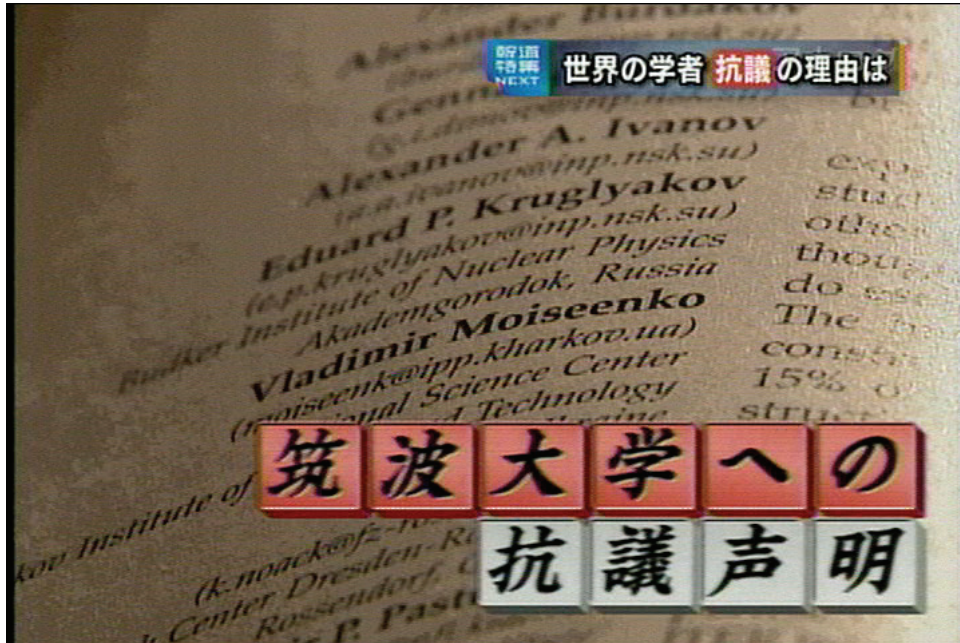
大きな注目を集めたのが、この2人。去年、ノーベル物理学賞を受賞した益川氏と小林氏だ。



日本の物理学者の快挙は、アメリカの学会誌でも、特集記事が組まれるほど大きな注目を集めた。題して、『世界の科学の粋が日本に』。
 その同じ冊子に、世界の科学者による、筑波大学への抗議声明が掲載されたことはあまり知られていない。



『教授の懲戒解雇に科学者たちが抗議』



事の発端は、筑波大学が去年3月、大学のプラズマ研究センター長を勤めていた長照二教授を懲戒解雇したことだった。

長教授が発表した論文に、データの改ざんがあったからだという。

教授の職を失った長氏の自宅。懲戒解雇から1年半、妻がアルバイトで家計を支える生活が続いている。25年勤めた筑波大学からは退職金も出ていない。

(長照二氏)

「このままでは、一体何が悪くて、一体何が原因でこんなことになっているのか。それがとても不思議で納得できない。」

長氏は一貫して不正行為はないと主張してきたが、筑波大学は去年3月、学生の告発を受け調査した結果、論文のデータに改ざんがあったため、懲戒解雇にしたと発表。全国に大きく報じられた。

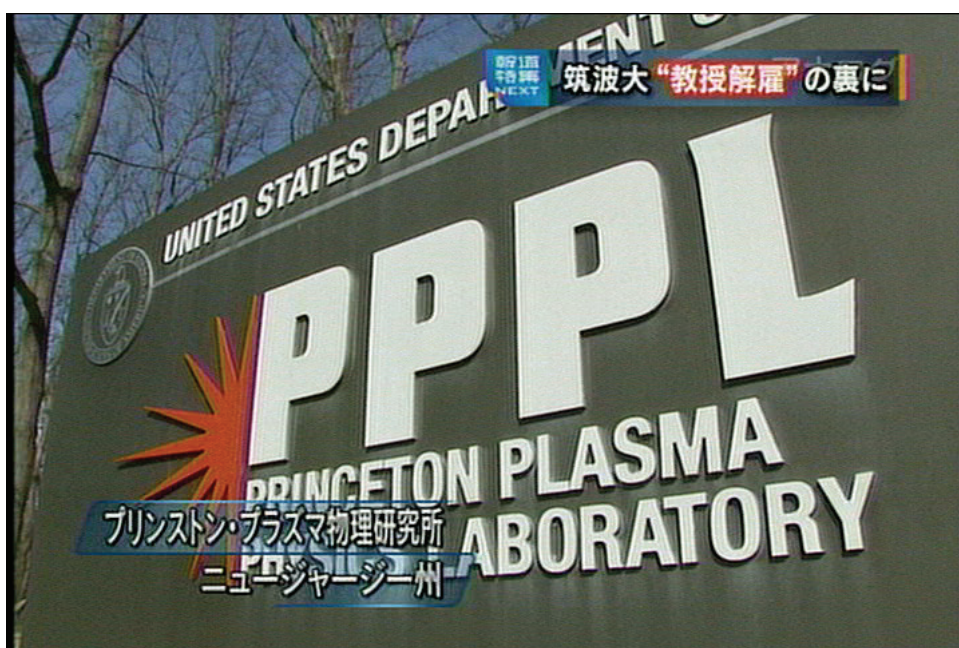


(妻)

「こんなことがあっていいのか。何かまるで悪いことをした犯人みたいな感じで、『絶対何かあるに違いない』というふうに疑いの目で皆さん見られると思うので、それがすごい悔しかったです。」

一体、長教授の論文の何が問題とされたのだろうか。

アメリカ・ニュージャージー州。連邦政府とプリンストン大学が共同で設立したプラズマ物理研究所がある。



地下を進むと見えてくるのが、筑波大学と同じ規模のプラズマ実験装置だ。

(記者)

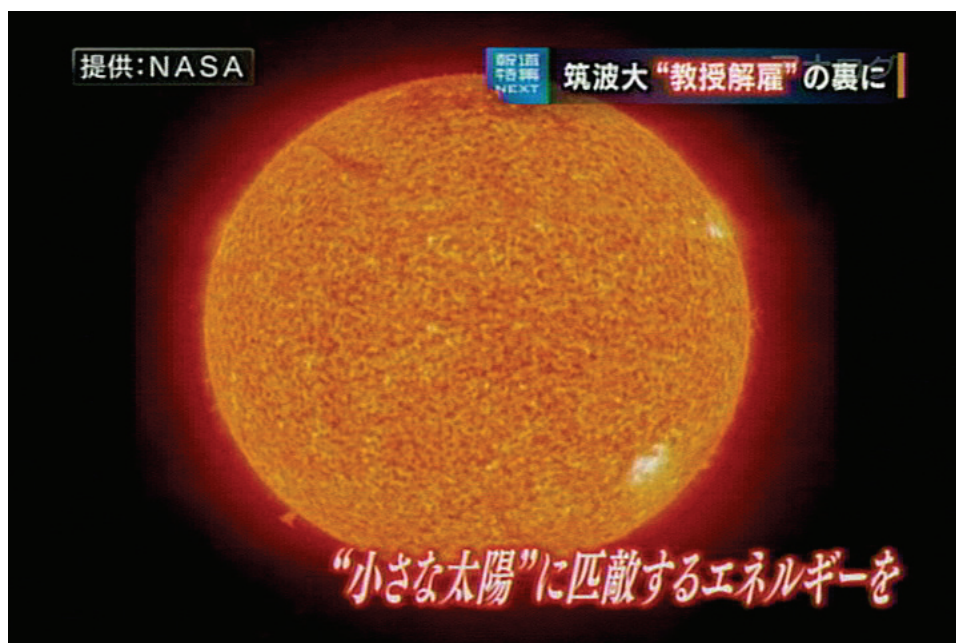
「普段は入ることができないんですけども、今日はメンテナンスのために、特別にここに入れてもらうことができました。これが世界でも最大級の実験装置です。」

この巨大な装置は、中がドーナツ型になっている。この中で、温度が1億度にも達するプラズマが発生する。

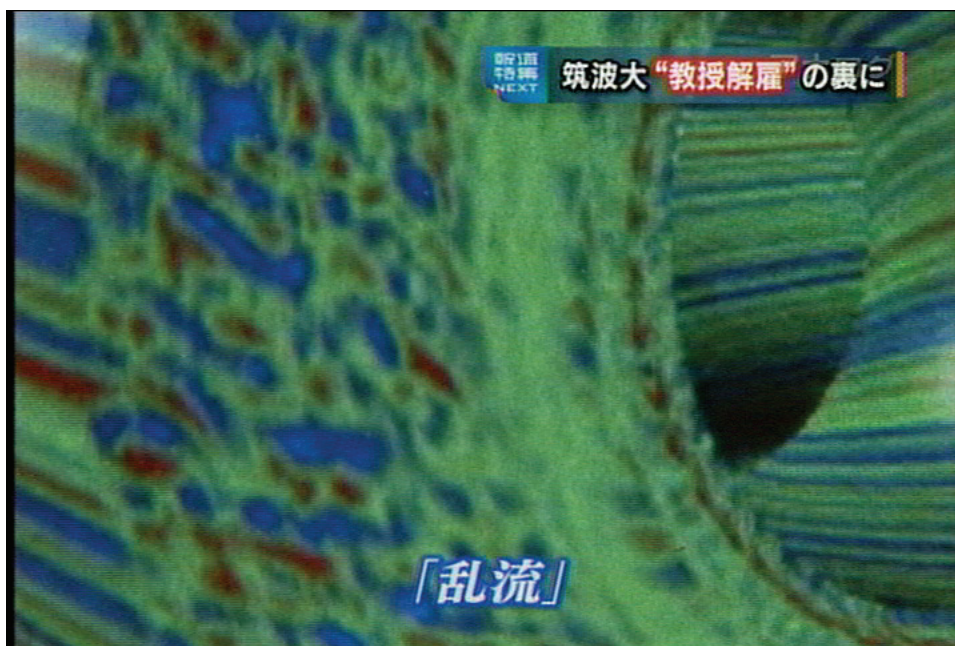
プラズマは電気を帯びた粒子でオーロラや稲妻がその例だ。プラズマディスプレイなどにも使われている。実は、太陽も、地球のような個体ではなく、電気を帯びた粒子がガス状に集まったプラズマでできている。

プラズマを用いて、小さな太陽に匹敵する膨大なエネルギーをつくる。そんな研究が、世界各国で巨額の費用を投じて行われているのだ。

石油や石炭が枯渇した後の未来のエネルギー源とするためだ。



このプラズマ研究における大きな課題。それは、装置の外との著しい温度差から発生するプラズマの乱れ、『乱流』を抑えることだった。

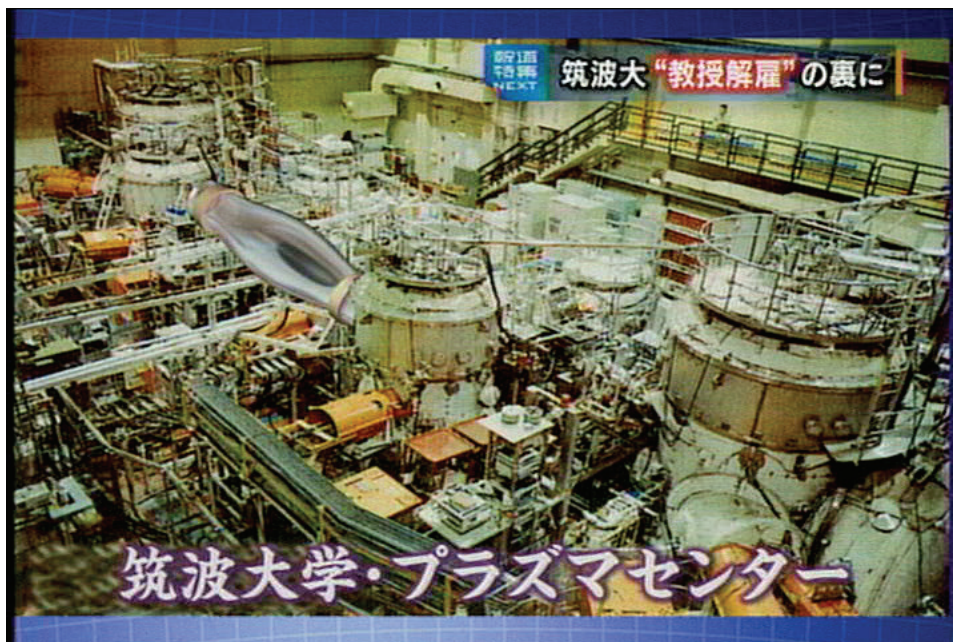


(プリンストン・プラズマ物理研究所 ナサニエル・フィッシュ教授)

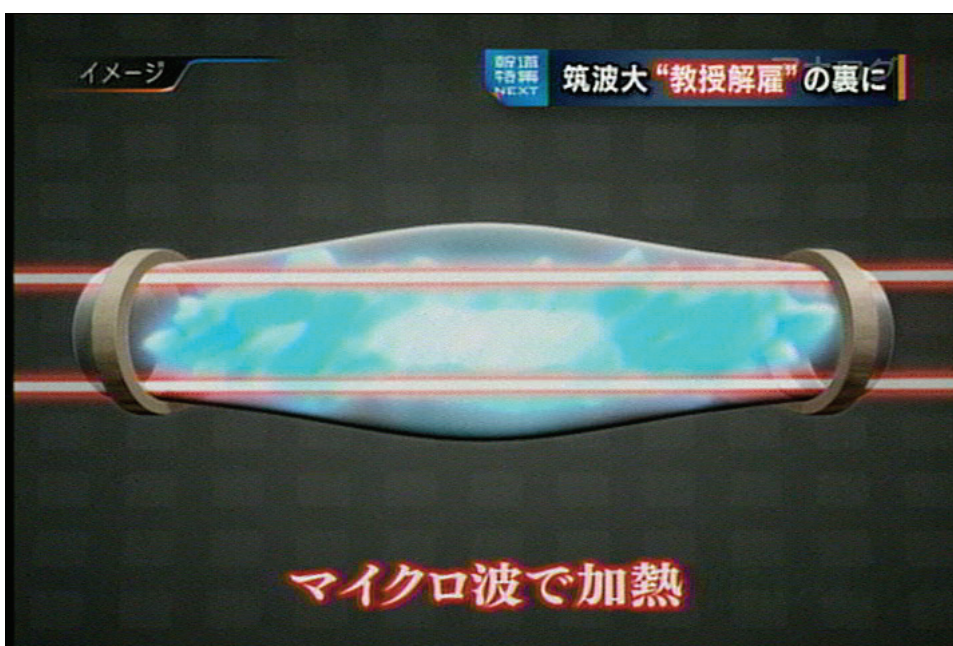
「筑波大学は、長氏の論文が示した歴史的な成果、科学的な意義について全く分かっていません。この分野に大きな進歩をもたらすものだったのです。」



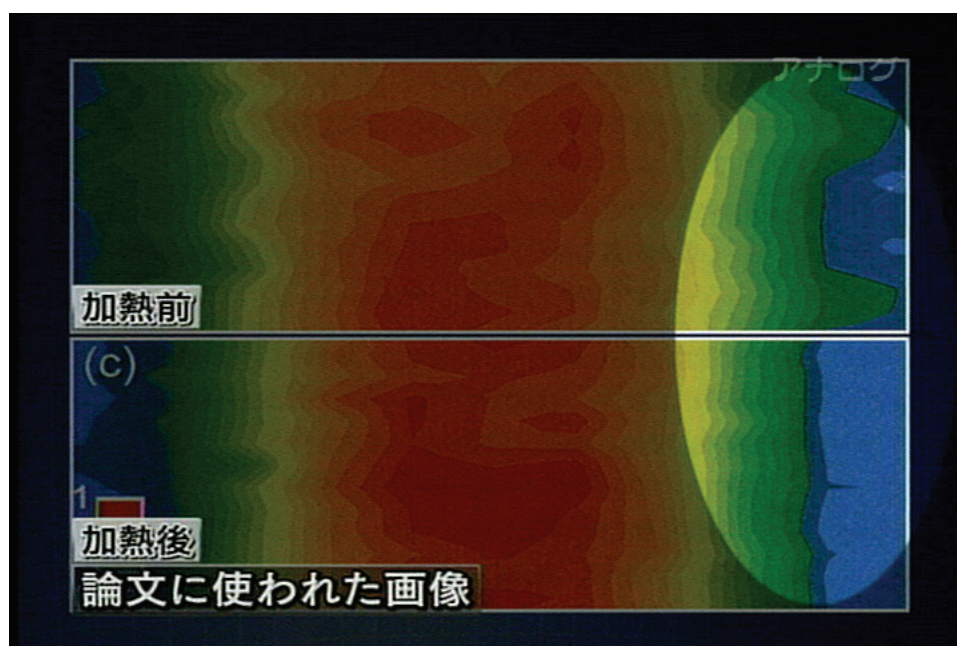
筑波大学プラズマセンターの実験装置。



長教授の論文は、特定の場所にマイクロ波で加熱をすれば、この乱流を抑制することができるという画期的な内容だったのだ。



撮影画像で、加熱の前後で乱流がおさまっていることがよくわかる。



長氏の論文が掲載された「フィジカル・レビュー・レターズ誌」。
物理学界で最も権威のある論文誌の1つだ。

(フィジカル・レビュー・レターズ誌 ダニエル・カルプ編集員)

「研究の重要性・掲載の価値をめぐって、厳しい審査で評価された論文だけを載せます。
自分の論文が一生に一度はこの雑誌に載る、それが科学者にとっての名誉なのです。」

長教授らの論文は、2005年、2006年と続けて掲載された。今回の一件がなければ、3年連続の掲載という偉業に挑戦するつもりだった。しかし、研究は中断を余儀なくされた。

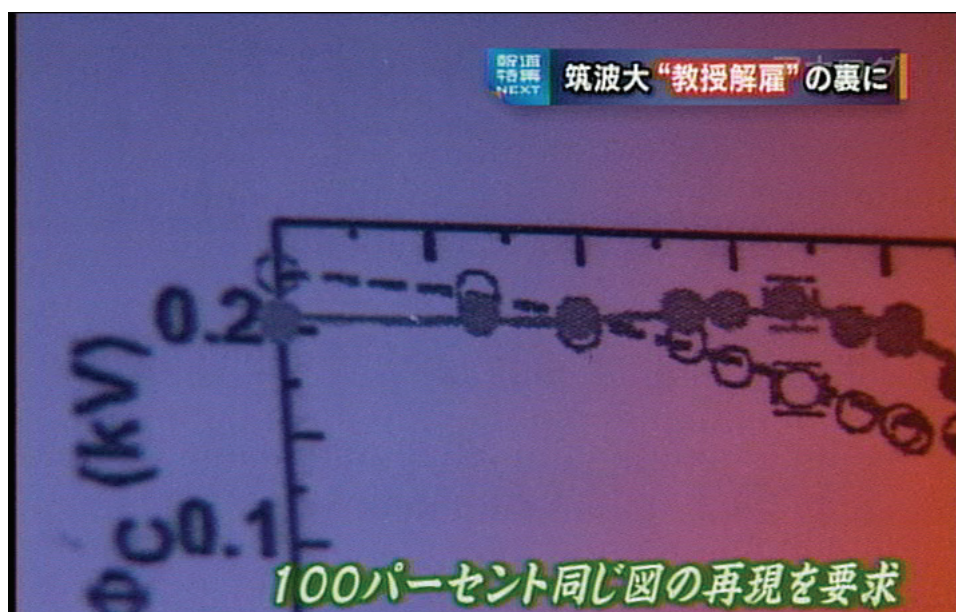
(フィジカル・レビュー・レターズ誌 デニエル・カルプ編集員)

「今も物理的に正しく、掲載価値があると評価しています。」



ところが、筑波大学は、高い評価を受けたこの論文に問題があるとした。論文の内容ではなく、そこに使われた2つの図にデータの改ざんがあるというのだ。

大学は外部の専門家を招き、調査チームを発足させた。そして、長教授らに対し、図に用いたもともとの生データを解析し直し、100%同じ図を再現するよう求めた。



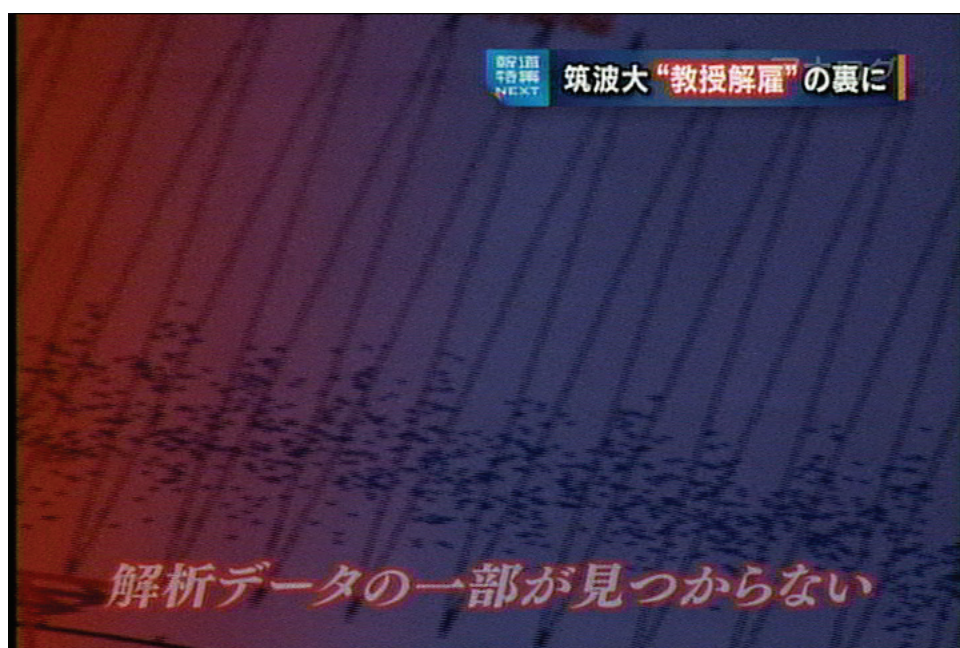
(長照二氏)

「2週間強ぐらいで回答しろということになって、いろんなものを調べてみますと、データ、解析したはずのデータの結果が、不思議なことに見当たらない」

何と、解析に必要なデータが消えていたのだ。



論文のデータを改ざんしたとして、筑波大学から懲戒解雇された長照二元教授。大学は調査の段階で、もとの生データから同じ図を再現するよう求めた。



ところが、再現に必要な解析データの一部が見つからない。

プラズマセンターでは、共用のコンピュータにデータを保存。

解析担当者がバックアップのディスクを持つのが原則だったという。

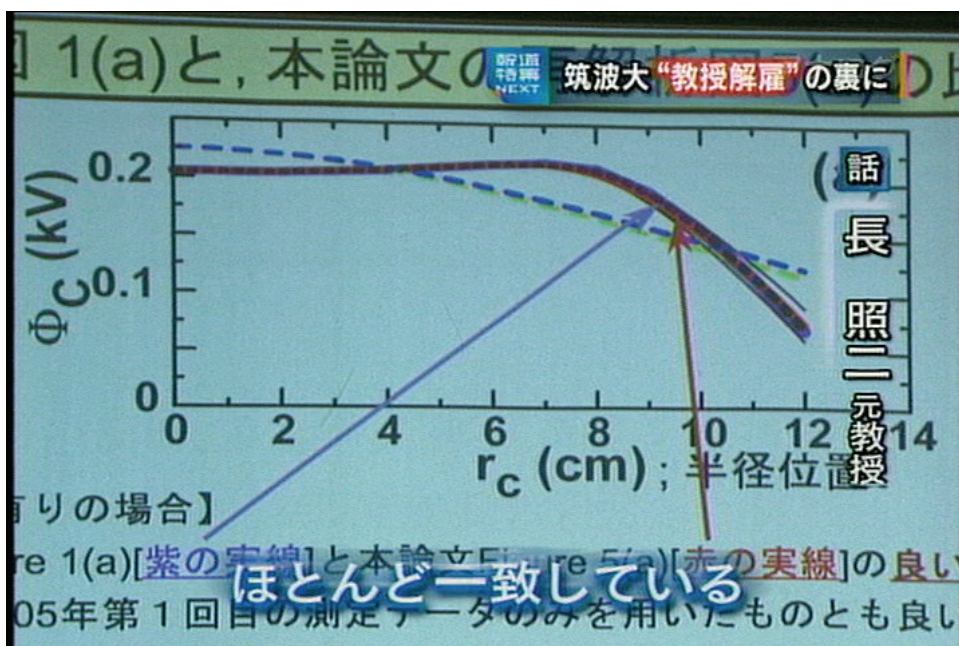


嚴重に管理されていたはずの、この2つのデータが、不可解なことに、両方とも消えていた。

そのため、一から解析し直して再現した図は、わずかに、もとの図と異なるものとなった。

(長照二氏)

「よく見れば、そりゃ、0.4パーセントとか、この辺りで、多少ずれているという部分も、多少ありますけども、もうこれは全く意味のない誤差。もうほとんど一致していると。」



もう1つの図の解析法についても、詳細に文書に記して提出したが、改ざんだという大学側の判断は変わらなかった。

(長照二元氏)

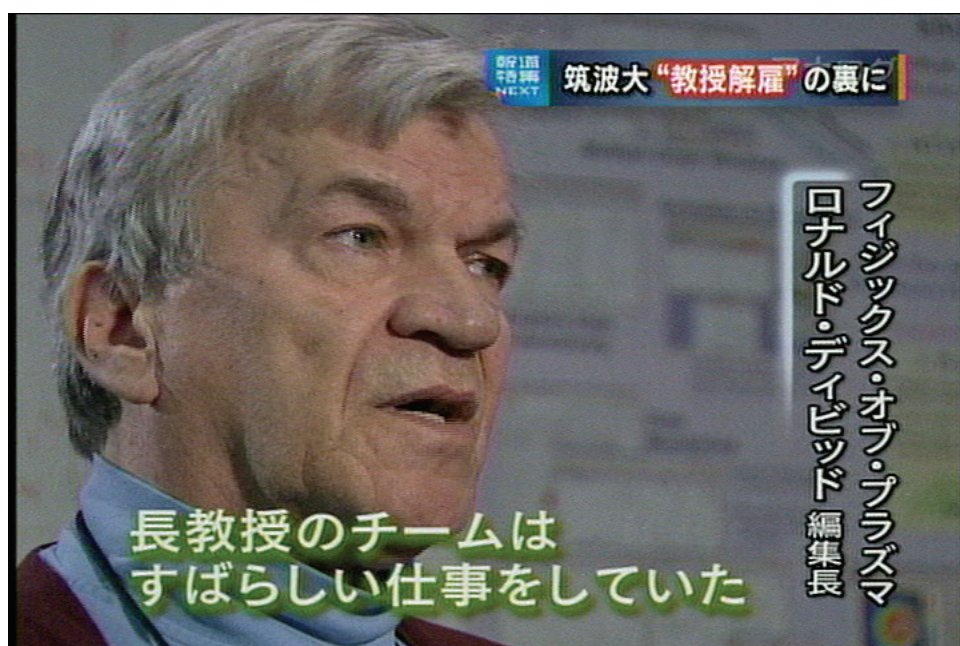
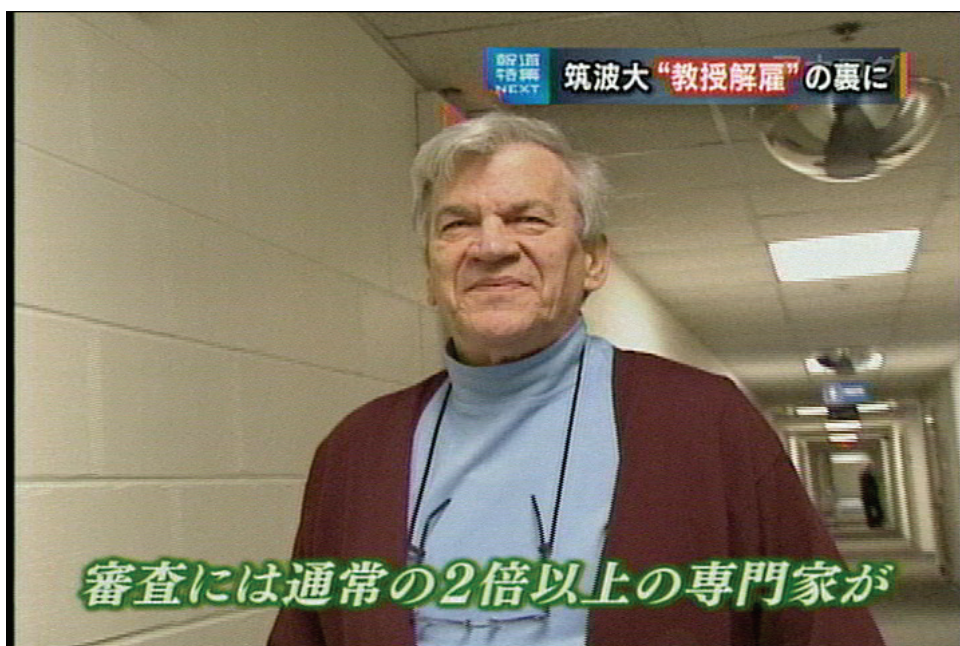
「だけど、結局は、どの部分がどう分からないかが、結局こちらに、はっきり伝わってこないで、認められない、という答えだけですんで、途中で、これは本当に危ないぞ、と思ひまして、これはもう世界の学者に問うしかないと。」



長教授は、大学に提出した文書と同じ内容を、新たに別の論文誌〔フィジックス・オブ・プラズマ誌〕に投稿した。疑いのかけられた2つの図の解析法を詳細に記し、その中身について、世界の科学者たちの審判を仰ぐつもりだったという。

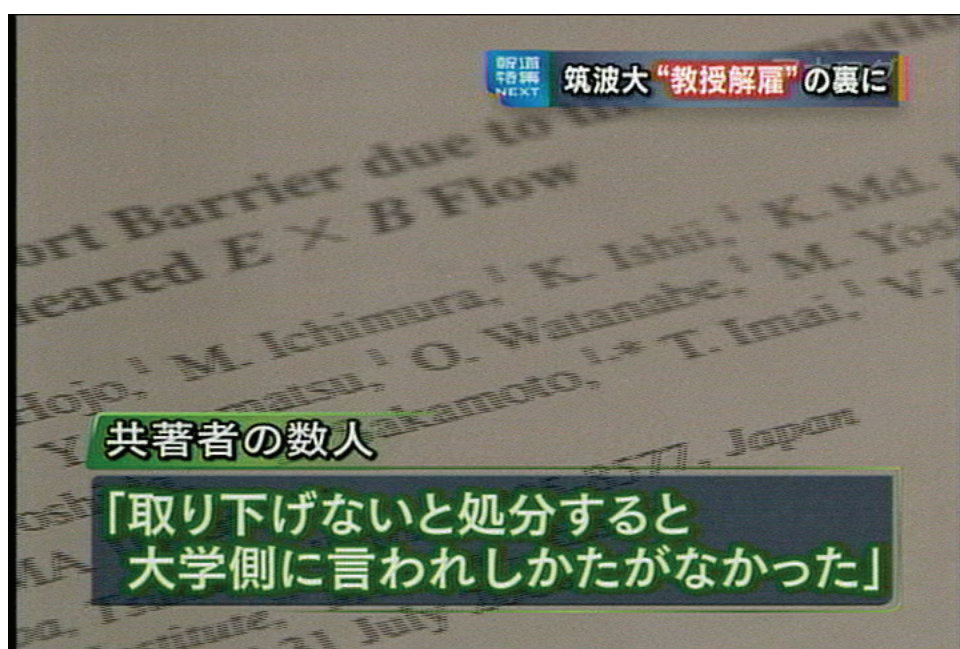
疑いのかかった論文が投稿されたとあって、審査には、通常の2倍以上の専門家が当たった。その結果、

(フィジックス・オブ・プラズマ誌 ロナルド・デイビッド〔ソン〕編集長)



「データについてさらに議論する余地が残されている論文は多いのですが、長氏のチームは素晴らしい仕事をしていました。大変質の高い論文で、掲載できたことを誇りに思います。」

ところが、筑波大学はそれでも、改ざんがあったとの判断を変えなかった。それどころか、長氏と26人の共著者に論文の取り下げを迫った。取り下げに応じた共著者のうち数人は、「内容に誤りがあるとは思っていないが、取り下

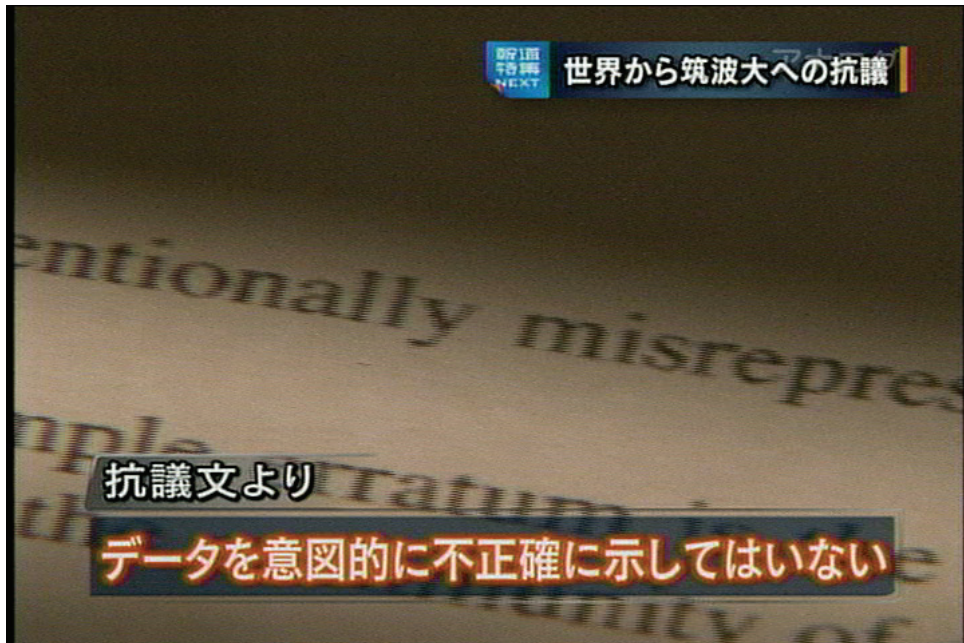


げないと処分すると大学側から言われ、仕方がなかった」と話している。

これに猛反発したのが、世界の科学者たちだった。アメリカから3人、ロシアから6人、スウェーデン、ウクライナ、ドイツ、日本。いずれもその分野の世界的権威である科学者が、当時の学長宛に抗議文を送り、長教授にかけられた疑惑を真っ向から否定したのだ。

『長教授の研究チームは、データを意図的に、不正確に示してはいない』
『論文の取り下げは、不要である』

抗議文を送ったうちの1人、アメリカのプラズマ物理研究所に所属するフィッシュ教授。



プラズマ学会で最高の栄誉とされるマクスウェル賞の受賞者だ。

(プリンストン・プラズマ物理研究所 ナサニエル・フィッシュ教授)

「ここでは筑波大学の主張は誰も信じていません。」

「彼らが主張する解析法は不適切です。」



「あらゆる関係書類を見ましたが、どこにも、本当にどこにも、改ざんの痕跡など見つかりませんでした。」

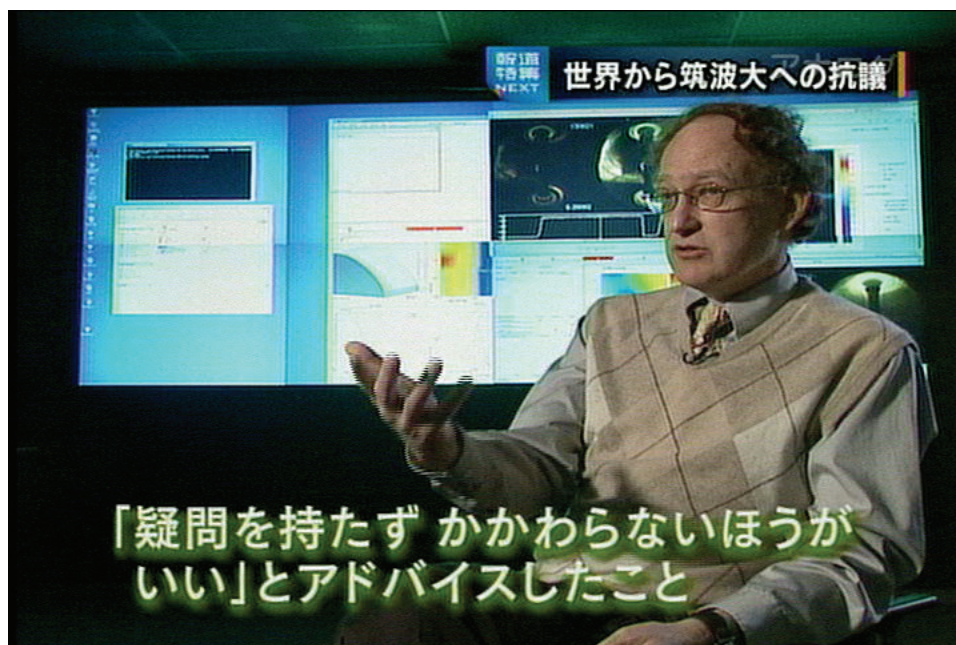
さらにフィッシュ教授を驚かせたのは、1人の科学者の研究生命が絶たれようとしてい



ることに対する、日本の研究者たちの冷淡な反応だったという。

(プリンストン・プラズマ物理研究所 ナサニエル・フィッシュ教授)

「驚いたのは彼らの多くが、『疑問を持たずかかわらないほうがいい』とアドバイスしたことです。」



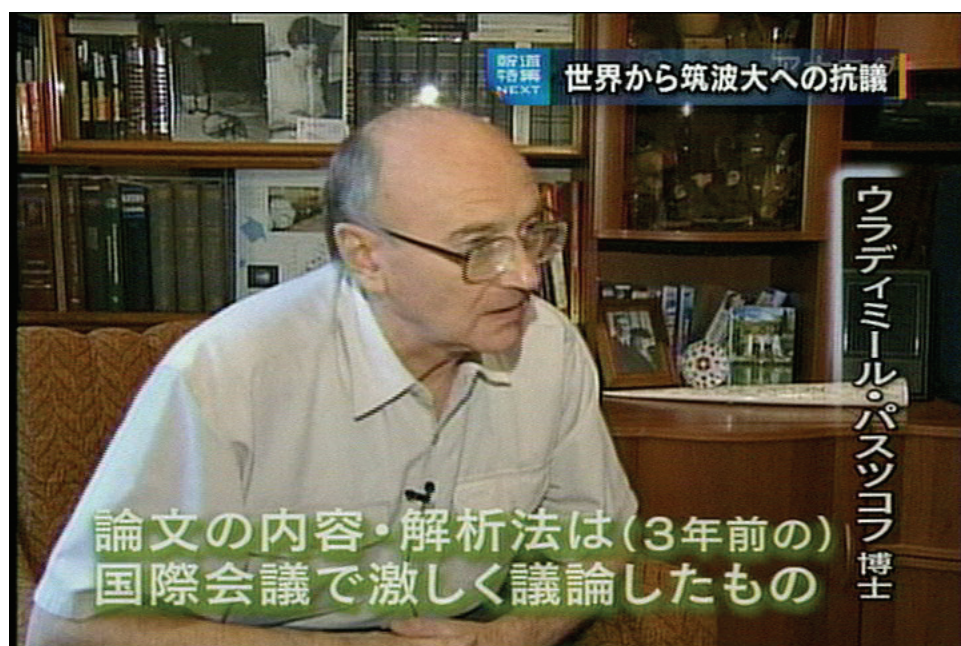
「そうした状況は、長氏個人ではなく、研究界全体にとっての悲劇です。だから、黙っていただけませんでした。絶対、黙っていることなどできないと思ったのです。」

ロシアで最も著名な物理学者とも言われるパスツコフ氏も署名に加わった1人だ。今回の論文の共著者でもある。

(クルチャトフ研究所 ウラディミール・パスツコフ博士)

「長教授は0.4パーセントの誤差で図を再現した。プラズマ学者は皆、素晴らしい結果だとみなしています。なぜ、それでいけないのでしょうか。」

公表された大学の調査結果について、専門知識が足りないと感じざるを得ないという。



(クルチャトフ研究所 ウラディミール・パスツコフ博士)

「今回の論文の内容・解析法は、(3年前の)国際会議で激しく議論したものです。なぜ、大学はここまで、世界的に著名な学者たちの意見を無視するのでしょうか？」